

希望も何もないこんな抑留生活がいつまで続くのか。教育局長のアフチンニコア女史はときどき私の学校を訪ねて来た。佐藤さんの学校はいい学校ですねとほめてくれる。本州の方に年老いた両親がいるので早く引揚げさせてくれと頼むと、あなたか引揚げたらあとに残った日本人の子供たちの教育は誰かしてくれますか。この部落の日本人がみんな引揚げようになつたら一番先にあなたがたを帰してあげますという。こんな生活が三年も続いた昭和二十三年六月ようやく引揚命令が出て真岡港から引揚船徳寿丸に乗船し、一路北海道函館港に向つた。長い三年間の抑留生活であつた。

函館の引揚者援護局の世話で空知管内の炭鉱地の学校に勤務することになったが、住宅が無いので炭鉱の八軒長屋の一戸を借りて引揚者としての何もない生活の第一歩が始まった。何年かたつて漸く人並みの生活ができるようになったが、樺太での終戦から三年間の抑留生活はわが家の生活を狂わせてしまった。

## 戦後、四十五年に想う

北海道 長 浜 みさ子

今は昔、昭和二十年八月、私は小学校二年生のとき、生れ育つた樺太で「生か死か」の体験をもつた者です。

まだ、幼く深い意味など分らなかったが空襲で疎開したときの苦しかった日々が、四十数年たった今もありありと思ひ出されます。

当時、私は両親から離れ兄のもとに行つていたので、その兄に召集令状が届き戦場に向かつたのが、十九年の夏でした。

残された私たち（義姉と二歳の娘）は留守を守っておりましたが、二十年にはいってだんだんと戦争が激しくなり、八月十三日頃だつたと思います。防空壕に避難していた私たちに疎開命令が出たのです。

一旦家に帰り身支度をして、再び班長さんのもとに集合しました。

「皆さん、この綱にしっかりとつかまって遅れないようについて来て下さい……」班長さんの大きな声は夜空にひびいた。

私たちは、必死でこの一本の綱にすがり夜の町を歩き始めたのです。

義姉は娘を背負い、私は食糧の入った大きなリュックを背負い夜道はつらかった。

七キロほど歩いたとき、隣町（恵須取）まで来たときは、今まで住んでいた思い出深い自分たちの町（塔路町）が火の海と化しているのが見えました。燃え上る炎は夜空を真赤に染めて幼い私は体が震えて止まりません。

そこも追われるように逃げました。

空を襲ってくる爆撃機の爆音のたびに、草むらをかき分けて身を隠し灼けつくような太陽の下を歩きつづけました。

夜は、林の中を宿にして疲れた体を横にしたときは何よりの安息の時間でした。

幼い私は、父や母の無事を祈りながら涙を流し眠りに

ついた毎夜のことでした。

背負っていた食糧も食べつくし、留守の家にはいつかは飢えを凌ぎながら歩きつづけた。

歩き続けて何日か立ったのだからか、聞くもの「ラジオ」もなく終戦の日も知らずさまよい歩いたのです。

知らされないときは、もうもうとソ連軍の戦車が続々と私たちに銃を向け、わけのわからないロシア語で話しながら通り過ぎて行く、恐ろしく殺されるのではないかと両手を上げて立ちすくんだことも何度か……

もう密航船で帰国することが出来るはずもなく来た道を引き返すより方法がなく気がついて見ると私たちの廻りには何人も残っていなかった。

帰る道すがら、道端には、家族に遅れたのでしようか、老人、病人、子どもたちの死体が重なり合っているのです。

そして、昭和二十二年五月、私たちは父母と共に北海道に引き上げることができました。

悪夢のような戦争、平和は如何に大切であるかを述懐しております。